北海道における口承文芸の研究動向

久保孝夫

(一) はじめに

北海道の昔話は本州とは異なる位相を呈している。それらは、先ず第一に先住者であるアイヌ民族の伝承、第二に津軽海峡を隔て津軽・下北と同一の文化圏を構成する道南の伝承、第三に明治以降に本州各地から内陸部に移住した開拓民の伝承と三つに大別できる。

アイヌの話は日本昔話とは全く異なるタイプのものであり、道南の話は日常使われる言語、ことわざ、俗信などの面で青森県側との一致点が多く見られる。開拓民の伝承には本州からの昔話はあまりみられず、開拓の歴史といった世間話的なものが主流である。

(二) アイヌ民族の伝承

第一のアイヌ民族が築いてきた文化は、開道以前の長い歴史の中で、受け継がれてきた独自の文化であり、明治以後の強い和人文化の浸透により、紆余曲折は続いたものの、今日までしっかり北海道の地に根付いてきている。金田一京助、久保寺逸彦、知里真志保などの業績はアイヌ口承文芸の根幹となっている。また、稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観Ⅰ北海道（アイヌ民族）』（同朋舎、平成元）には五九三篇の話型、その一つひとつに類話や参考話が付き、モチーフ構成という分析と解説・資料目録などが載っている。金田一・久保寺・知里以後に発表されたテキストや研究・考察などの流れについては、奥田統己「近年のアイヌ口承文芸テキストと口承文芸研究」『口承文芸研究』第13号（日本口承文芸学会、平成2）に詳しい。

奥田氏の報告に、最近の分を一・二付け加えると、アイヌ民族自身によるアイヌ研究という点では、山本多助『イタク　カシカムイ《言葉の霊》』（北海道大学図書刊行会、平成3）「アイヌ語は日本語の祖語である」「アイヌ語は性行動から生まれ発展した」との二つの視点からまとめた論文、長老の炉辺談話といった趣で書かれている。中川　裕校訂・大塚一美編訳『キナラブック口伝　アイヌ民話

全集Ⅰ　神謡編Ⅰ』（北海道出版企画センター、平成2）には神謡（オイナ）二九篇が収められている。静内町文化財調査報告書『静内地方の伝承Ⅰ　織田ステノの口承文芸(1)』（静内町教育委員会、平成3）は町教委が主催した「ユーカラの夕べ」で、織田媼が口演したユーカラ二編を、カタカナとローマ字で表記したもの。

ロシアの民族学者ニコライ・ネフスキーの民話集の和訳本が出版された。エリ・グロムスカヤ編・魚井一由訳『ニコライ・ネフスキー　アイヌ・フォークロア』（北海道出版企画センター、平成3）二六の物語が収められ、うち二三編には、アイヌ語の正確な表音が併記されている。

アイヌの民族的アイデンティティの確立と民族文化の伝承への動き、歴史的背景を理解する上で画期的な労作が出版された。北海道新聞社会部編『銀のしずく　アイヌ民族は、いま』（北海道新聞社、平成3）である。平成3年度日本新聞協会賞を受賞。

「公開講座」北海道文化論の一環として、萩中美枝「アイヌの文学　ユーカラへの誘い」（語り）織田ステノ「カムイユーカラ」『アイヌ文学に学ぶ』（札幌学院大学人文学部、平成3）がある。二十年以上もアイヌ民族文化に取り組んでいる旭川竜谷高校郷土部の活動成果が記録集として発刊された。「伝承者と生徒たちとの交流記録」『川上アイヌの研究』調査資料152（日本私学教育研究会、平成2）地域史を教材にする試みとしては特筆に値する。

(三)　道南と開拓民の伝承

道南と開拓民の伝承について、①昔話・民話、②伝説、③笑い話、④世間話、⑤俗信・ことわざ、⑥民謡・わらべ唄、⑦その他にわけて研究動向をみる。

①昔話・民話について、渡島半島から日本海沿岸にかけて、古くから和人が住み着き、その子孫によって伝承されてきたもの、明治以降数十年続いた開拓者の生活から生まれた自然との戦いや体験談をさまざまな形で後世に残したいと考え、昔話・民話として纏められたものが多くある。

浜田広介『ふるさとのはなし1』北海道・東北地方（さ・え・ら書房、昭和42）、森野正子『北海道・昔話』第一集（山音文学会、昭和45）、堀内興一『北海道・昔話』第二集（山音文学会、昭和51）第三集（同、昭和53）、坂田貞和『日本の民話』第一巻北海道（研秀出版、昭和52）、日本児童文学者協会「金の小犬銀の小犬」『県別ふるさとの民話』6北海道（同協会、昭和53）、浅井　亨『日本の民話』北海道（ぎょうせい、昭和54）、更科源蔵「北の昔ばなしと民話を集めた巻」『北海道児童文学全集』第14巻（立風書房、昭和59）、石橋勝治『北海道のむかし話』（北海道むかし話研究会、昭和62）、北海道口承文芸研究会『北海道昔ばなし』道南・道央・道東・道北編（中西出版。平成元）、『北海道の口承文芸主要資料目録Ⅰ』（響文社、平成元）、阿部敏夫・矢島　睿『北の語り』（北海道

口承文芸研究会、昭和60、現在六号まで刊行）などがある。

各地域毎で纏められたものに、道南では、葉梨孝幸『道南の民話』（昭和53）『乙部・むかしばなし』（私設乙部町町史研究室、昭和53）、岡　節三・阿部敏夫・栩野清貴・久保孝夫『道南地方の昔話を求めて』（自刊、昭和58）、小林優幸『江差の伝説と民話　江差ものがたり』（江差町民話の会、昭和58）須藤隆仙『ふるさとの民話』（昭和58年より北海道新聞に掲載中）、坂口延幸『箱館昔話』（函館パルス企画、平成元、現在四号まで刊行）、恵山町『ふるさと民話集』（恵山町教育委員会、平成2）がある。

道南以外では、標茶町老人クラブ連合会『標茶むかしむかし物語』第一集（同連合会、昭和44）、池田輝海『深川のむかし』（深川市教育委員会、昭和45）、岩見沢市『いわみざわの民話』（岩見沢市教育委員会、昭和48）、伊東　博『いわみざわの民話』（岩見沢市郷土資料室、昭和51）同二集（昭和53）、秋山　寛『志文民話』第一集（志文中学校、昭和52）、空知地方史研究協議会『空知のむかし話』空知の民話シリーズ　第一集（同協議会、昭和58、第三集まで刊行）、羽幌町文化連盟『羽幌の民話』（同連盟、昭和59）、河野常吉『さっぽろの昔話　明治編上・下』（みやま書房、昭和53）、札幌市白石区老人クラブ連合会『白石歴史ものがたり』（同連合会、昭和53）、大山黙笑『さっぽろの昔話　大正編上』（みやま書房、昭和53）、坪谷京子『さっぽろ　むかし　あったとさ』（共同印刷、昭和60）『語りつがれたふるさとの民話・伝説』（北海道婦人アカデミーガイドブック、平成2）、小山踏尾『えんべつ民話と伝説』（遠別文芸を語る会、昭和61）、朝倉光治『たかす昔ばなし』第一集（鷹栖町文化協会、たかす民話の会、昭和61）、第二集（同、昭和62）、乾芳宏「新冠の昔話」『にいかっぷ』（昭和58）、福田隆三『むろらんふるさと百話』（みやま書房、昭和48）、星　丈雄「室蘭むかしむかし　チケウの海の親子星」『遠い日のはなしシリーズ』（袖珍書林、昭和62）、昔の漁民の生の姿を掘り起こしたものとして、工藤浄真『利尻の昔話』（国境印刷、昭和62）がある。歌志内歴史資料収集・保存会『歌志内のむかしばなし―歴史の散歩道―』（同保存会、昭和62）、山田与一郎『新城の民話集一』（芦別市新城老人クラブ寿会、昭和63）『新城の民話集二』（平成元）、平田角平『新十津川の昔話』（新十津川教育委員会、平成2）がある。富山県宇奈月町と苫前郡初山別村との比較研究をこころみている久保孝夫「口承文芸」『むらの生活―富山から北海道へ―』（宮良高弘編　北海道新開社、昭和63）がある。

②伝説については、昭和三年七月、ＮＨＫ札幌放送局から放送された河野常吉の「北海道の今昔」が契機となり、『北海道郷土史研究』（札幌放送局編、昭和7）が発行された。吉田　巌「アイヌの伝説」、我孫子倫彦・名越源五郎「屯田兵物語」、橋本堯尚「義経の蝦夷逃避行」「小樽の昔噺」、深瀬春一「松前伝説」、岡田健蔵「箱館開港史話」、宮崎大四郎「函館の昔噺」などを一巻に纏めてある。その後、中村安造『礼文山水と趣味の伝説』（青空詩社、昭和7）、畑山定治『江差名勝と伝説』（熊木書店、昭和8）、『松前江差伝説』（万屋書店、昭和9）、深瀬春一『伝説の福山』『伝説の渡島』（昭和

9）『改訂　蝦夷地における和人伝説孜』（間瀬印刷所、昭和11）、石附舟江『伝説蝦夷哀話集全』（太陽舎、昭和11）がある。

昭和十年代、地方自治体として北海道全域にわたって口碑伝説の収集に取り組んだ、北海道庁『北海道の口碑伝説』（昭和15）があり、特筆に値する。戦中・戦後二十年代にかけては社会情勢の上からも目立ったものは見られない。渡辺　茂『北海道の伝説・和人篇』（楡書房、昭和31）、葉梨孝幸『檜山の史跡と伝説』（第一印刷所、昭和43）、『北の夜話―道南伝説の旅―』（みやま文庫、昭和45）、須藤隆仙『南北海道を中心とする伝説考』（手書きガリ版、昭和45）再版として『北海道の伝説』（山音文学会、昭和46）、藤沢衛彦『少年少女日本伝説全集』第1集（東京創元社、昭和36）、渡辺　茂『北海道の伝説』（北海道出版企画センター、昭和51）、浜　道人『北海道・ロマン伝説の旅』（噴火湾社、昭和51）、更科源蔵『北海道の伝説』（角川書店、昭和52）、北海道郷土教育研究会『北海道の伝説』（日本標準、昭和56）、脇　哲『新北海道伝説考』（北海道出版企画センター、昭和59）、宮田　登「北海道・北奥羽」『日本伝説体系Ⅰ』（みずうみ書房、昭和60）などがある。それぞれの地域に根ざしたものとして、松前高校郷土研究部『福山の口碑伝説』（昭和45）、上ノ国町教育委員会『かみのくにの文化財と伝説』（昭和51）、新岡武彦『枝幸郡の伝説と昔話』（枝幸町、昭和62）がある。

義経が追っ手から逃れ蝦夷地に渡ったという話が伝えられ、矢越岬、弁慶岬、刀掛岩、義経岩、義経神社などがある。読売新聞社『カメラ紀行　義経残照』（平成2）は写真集として興味を惹く。樋口忠次郎『義経入夷伝説』（ぶやら新書刊行会、昭和44）、白山友正『松前蝦夷地義経伝説考』（北海道経済史研究所、昭和47）、斧　二三夫『北海道の義経伝説』（みやま書房、昭和56）、関　幸彦『源義経　伝説に生きる英雄』（清水書院、平成2）がある。また、菅江真澄の紀行文をもとにして、東北地方と北海道の史話と伝説を書いたものとしては、野呂　進『北国の史話と伝説（上）（下）』（山音文学会、昭和46）、小林優幸『菅江真澄と江差浜街道』（みやま書房、昭和59）がある。

つぎに、③笑い話の世界である。道南において、笑い話の主人公は殆ど「江差の繁次郎」に代表されるといってよい。繁次郎は江差の出稼ぎ人で、ニシン漁に従事する人物としてほぼ共通した具体的イメージが存在し、漁民の間に語り伝えたおどけ者の話である。中村純三『江差の繁次郎』（函館新聞社出版部、昭和24）、『続江差の繁次郎』（同、昭和25）、『江差の繁次郎』（正・続）（みやま書房、昭和52）、『江差の繁次郎』（江差観光協会、昭和56）、岩淵啓介、宮下正司、松村　隆、小林優幸、館　和夫、津山正順、駒形哲朗ら江差かわら版同人会『江差の繁次郎』（江差文庫社、昭和63）同人による私の「繁次郎」論を付け加え、どのように伝承されてきたか、笑い話の源流と原型などを詳しく紹介している。江差の繁次郎ばなしに見られる漁業出稼ぎ者による伝承と変容は、花部英雄「繁次郎考―青森県を中心に―」『口承文芸研究』第5号（日本口承文芸学会、昭和57）に詳しい。

④世間話について、開拓村落の民俗調査に参加して実感すること

は、明治生まれの爺様婆様が少なくなり、十人のうち九人までが大正・昭和の生まれ、長い人生体験の中で、一番強く、生々しく記憶に残っていることは、戦争の体験とその思い出だという。開基百年を迎えた町村の昔話や開拓時の苦労話などは次第に忘れ去られようとしている。

宮良高弘編『北海道を探る』（北海道みんぞく文化研究会、昭和57創刊、現在22号まで刊行）に載っている48名各個人の生活史（パーソナル・ライフ・ヒストリー）は個人をとりまく時代や社会生活において普遍性があり、世間話として最たるものである。さらに、伊藤　廣『屯田兵の家族として』（昭和50）、西オノッペ村『開拓よもやま話（古老談話）』（西オノッペ村、昭和52）、中村正勝「古老が語ったふるさとのよもや話」『つぎだらけの昔話』（昭和56）、杉山四郎『古老が語る民衆史』（みやま書房、昭和60）、三栖達夫『標茶の明治・大正そして昭和初期（古老が語った思い出の話）』（昭和61）、札幌郷土を掘る会「体験者が語る　戦後も続いたタコ部屋労働―真駒内米軍基地建設工事―」『札幌民衆史Ⅰ』（昭和62）、久保孝夫「老人の知恵に学ぶ」『研究集録　おおつま』（函館大妻高校、昭和62創刊、現在第五号まで刊行）、開拓者の子として吉田おさむ『おじいちゃんの昔話』（中西印刷、昭和63）、藤倉徹夫『れんがと女』（江別市教育委員会、平成元）、渡辺　滋『米寿を迎えて上田太作翁の回想』（㈲アト・ワーズ、平成3）などがある。

戦争体験を次代に語り継ぎ、平和の大切さを知ってもらおうと、妹背牛町遺族会『英魂を偲ぶ』（妹背牛町戦没者記念誌編集委員会、平成元）、浅利政俊『教えて下さい、函館空襲を』（幻洋社、平成3）などの証言集がある。

⑤俗信・ことわざについては、古くは北海道庁『お産に関する迷信伝説』（北海道庁警察部、大正13）に載っている。矢島　睿『北海道祝事　誕生・婚姻・年祝い』（明玄書房、昭和53）『北海道の葬送・墓制』（明玄書房、昭和54）「鰊漁場の民俗」『北海道の研究』（№7民俗・民族篇（清文堂、昭和60）、宮内令子「産育に関する俗信」矢島　睿「躾と禁忌」『ほっかいどう青少年』（北海道青少年育成協会、昭和61）がある。地元に古くから伝わる海洋気象を中心にした、津軽海峡海難防止研究会『津軽海峡の天気とことわざ』（北海道新聞社、平成元）、久保孝夫「老人の知恵に学ぶ―戸井町瀬田来と津軽のことわざについて―」『研究集録　おおつま』№2（函館大妻高校、昭和63）がある。

⑥民謡・わらべ唄について、北海道教育委員会が実施した民謡緊急調査の結果の『北海道の民謡』（北海道教育委員会、平成元）には、道内各地の民謡・わらべ唄が殆ど網羅されている。巻末に参考文献が詳しく載っているが、その他、佐藤利雄「ヨイチの民謡」『道歴研だより』第13号（北海道歴史研究会、昭和63）がある。

わらべ唄については、道南詩人くらぶ『ころ・ぽっくる』（函館歌謡創作集団、昭和22）浅野建二『わらべ唄風土記』（塙書房、昭和44）、佐藤洋輝『南北海道におけるわらべ唄』（知内歴史研究会、昭和46）、樋口忠次郎『北海道のわらべうた』（ＨＴＢまめほん、昭和48）、藤島範孝『北海道のわらべ歌』（北海道新聞社、昭和51）、

高橋明雄『増毛沿岸にみる浜の遊びと童歌』（昭和52）、松本達雄・更科源蔵『北海道のわらべ歌』（柳原書店、昭和60）がある。

⑦その他各市町村によって、民俗編として地方史や地方誌の編纂がなされている。市町村史（誌）についてはすべてを網羅できないので、古老の談話や伝説と民話を載せている主なものをあげる。開基百年を迎えた町村などは努めて開拓期の苦労話を語っている。『枝幸町史』『興部町史』『白滝村史』『丸瀬布町史』『置戸町史』『東藻琴村誌』『しむかっぷ開基八十年記念誌』『留萌市史』『秩父別町史』『雨竜町史』『新十津川町史』『月形町史』『厚田村史』『幌加内町史』『厚別開基百年史』『上野幌百年のあゆみ』『新琴似百年史』『静内町史』『様似町史』『浦河町史』『荻伏百年史』『積丹町史』『音別町史』『知内町史』『戸井町史』がある。開基百年を記念していずれ近くに発刊されるであろう『妹背牛町百年史』（下巻）、『新門別町史』などにも口承文芸の項が位置づけられている。

各高等学校の郷土研究部の研究に目覚しいものがある。各年度毎、高文連（北海道高等学校文化連盟）『集録』に研究発表の要約が掲載されている。口承文芸に関連するもののみ列挙すると、旭川大学高校「旭川の戦後開拓」（平成元・2）、音威子府高校「中川地区におけるタコ部屋」（平成2）、根室高校「北方領土研究シリーズ」として色丹国後島（平成元）、志発国後島（平成元）、国後島（平成2）、択捉島（平成3）旧島民の生活の聞き書き。枝幸高校「我が町・枝幸―その魅力を探る―」（平成元）、美唄南高校「空知地方の鉄道と開拓」（平成3）、浜頓別高校「僕らの村にもあった戦争の傷跡―浅茅飛行場―」（平成3）、名寄工業高校「明治期・北海道における移民の歴史―名寄山形入植の背景―」（平成3）、「名寄のいしぶみ」（昭和55）、風連高校「戦争を知る―先生達の体験を聞いて―」（昭和57）、和寒高校「道北の女たち」（昭和52）がある。特に、豊富高校『とよとみの民話』（昭和61　創刊号、「子育て地蔵」「万願山」「音吉の杜」「言問の松」「大師祭」など現在第五集まで刊行）は、地域理解と地域への伝達を二大目標に豊富の開拓から今日までの変遷をいろいろな面から調査研究し、民話集として発刊してきた。高校生が自分を育ててくれた郷土に眼を向け、先人の〝心〟を探り、精神的な系譜を辿ろうとした発想は、実にユニークで価値のある活動である。

昔話の啓蒙書として、高橋宣勝・高橋吉文ら北海道大学放送教育委員会編『口承文芸の世界』（北海道大学図書刊行会、平成元）がある。ＨＢＣラジオの北海道大学放送講座のテキストとして編纂、適切な口承文芸入門書である。

口承文芸の記録としては、北海道開拓記念館をはじめ各地方の博物館や資料館・教育委員会などでも、それぞれの地域の実情に応じて、着実な調査が進められている。矢島　睿・関　秀志らが北海道開拓記念館『北海道開拓記念館調査報告』、野村武雄・佐藤利雄・冨水慶一らが北海道文化財保護協会『北海道の文化』、西谷栄治・工藤浄真らが利尻町立博物館『利尻町立博物館年報』『利尻郷土研究』への報告などがある。

(四) むすび

前述の『日本昔話通観Ⅰ』(同朋舎)に見られるように、北海道の昔話はアイヌ民族篇として纒められている。北海道全域を見通した口承文芸研究を目指し、将来、津軽海峡圏も含め、明治以降百二十年の歴史をもつ開拓村落や各地域の昔話を日本民族篇として纒めることが今後の課題である。その一里塚として、筆者は『津軽海峡圏の昔話』(青森県文芸協会、平成4)を上梓した。

なお、今回は紙幅の関係で著者・著書名の列挙のみでコメントは割愛した。内容などは、「北海道の口承文芸の課題」と題して、北海道文化財保護協会・創立30周年記念誌『文化財保護の足跡』(同協会、平成4)に寄稿した。本稿と併せて参考ねがいたい。

本稿をまとめるにあたり、宮良高弘・佐々木達司、資料収集については白井美帆子の各氏に多大の協力をいただいた。謝意を表する次第である。

(くぼ・たかお/函館大妻高等学校)